

## 聴講申込書（コピー可）

一般	氏名	年齢	歳
		性別	男 女
高校生	高校名	高校 年	年齢 歳
	氏名		性別 男 女
現住所 連絡先	〒	—	
	電話	—	—
職業	公務員	会社員	教員
	自由業	自営業	学生
	高校生	主婦	無職
			その他
希望受講日に○を記入	申込締切日（必着）	聴講料（高校生は半額）	合計聴講料 ¥
4月1日（土）	3月28日（火）	¥1,000	
4月8日（土）	4月4日（火）	¥1,000	
4月22日（土）	4月18日（火）	¥1,000	
5月13日（土）	5月9日（火）	¥1,000	
5月20日（土）	5月16日（火）	¥1,000	
全講義（5日間）	—	¥4,000	

### ■申し込み方法及び受講料のお支払いについて

- 「聴講申込書」（この用紙・コピーでも可）に必要事項をご記入ください。
- 聴講料を、最寄りの郵便局から下記口座へお振込みください。

口座番号：00100-6-110037 加入者名：東京大学総合研究会

- 振込後、「郵便振替払込金受領証」のコピーをこの用紙下記に貼付し、**官製はがき**を同封の上（宛先に申込者の住所・氏名を記入）、下記へ封書でお申し込みください（各講義締切日必着）。折り返し、聴講券をお送りします。

- 申し込み先  
〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学総務部内  
（財）東京大学総合研究会 公開講座係
- お問い合わせ 03-3815-8345（直通）

### 郵便振替払込金受領証コピー貼付欄

（受領証そのものでも構いませんが返却はできませんのでご注意ください。）

## 東京大学公開講座聴講申込のご案内

聴講資格 成人一般・大学生・高校生  
定員 800名  
会場 東京大学大講堂[安田講堂]（本郷キャンパス）  
聴講料 全講義（5日間）一括申込 4,000円  
選択（1日） 1,000円  
※高校生は半額とします。



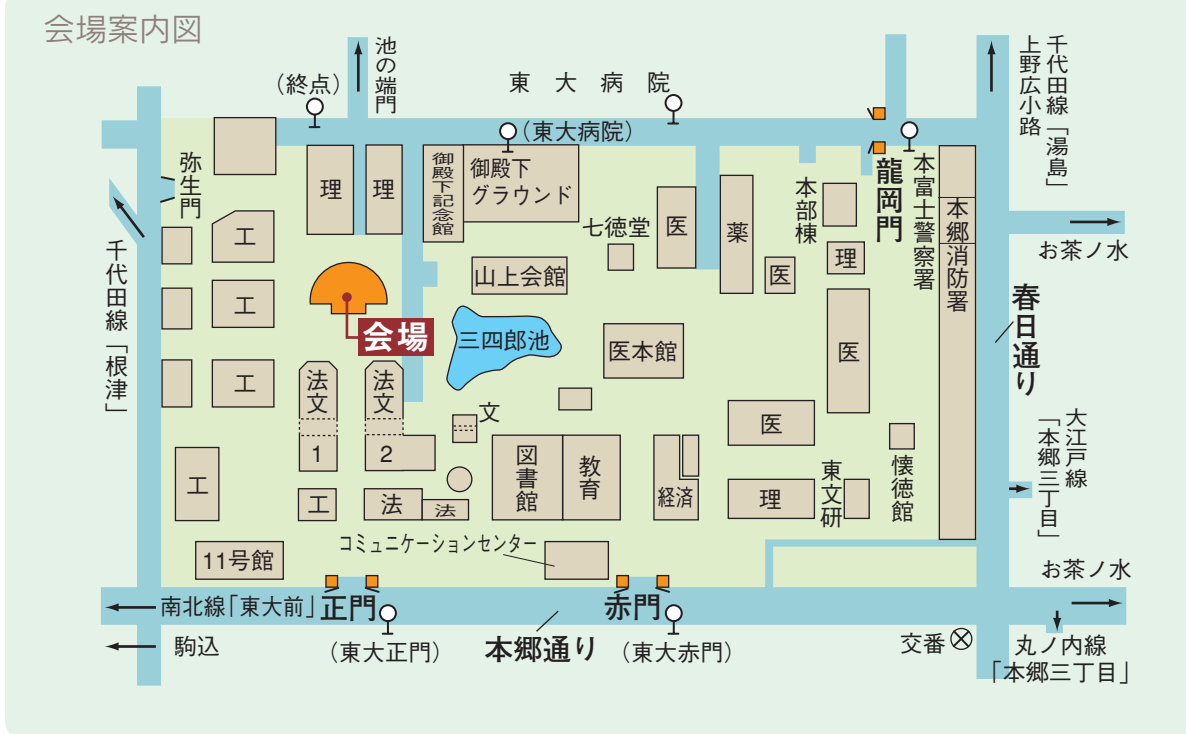
申込受付 平成18年3月から  
申込方法 「聴講申込書」に必要事項をご記入の上、申込書記載の手順に従ってお申し込みください。申込書はホームページからもダウンロード可能です。  
**※当日参加も可能ですが、定員に達した場合にはお断りすることもあります。**  
修了証書 全講義一括で聴講を申し込みられた方が3日以上出席された場合は、ご希望により修了証書を差し上げます（選択申し込みで3日以上出席されても交付できません）。

### 東京大学への経路

■鉄道利用  
【本郷三丁目】地下鉄丸の内線・大江戸線  
【湯島・根津】地下鉄千代田線  
【東大前】地下鉄南北線

■バス利用  
【お茶の水駅】茶51駒込駅、王子駅又は東43荒川土手行→東大（赤門前、正門前、農学部前バス停）下車  
学07東大橋内行→東大（龍岡門、病院前、構内バス停）下車

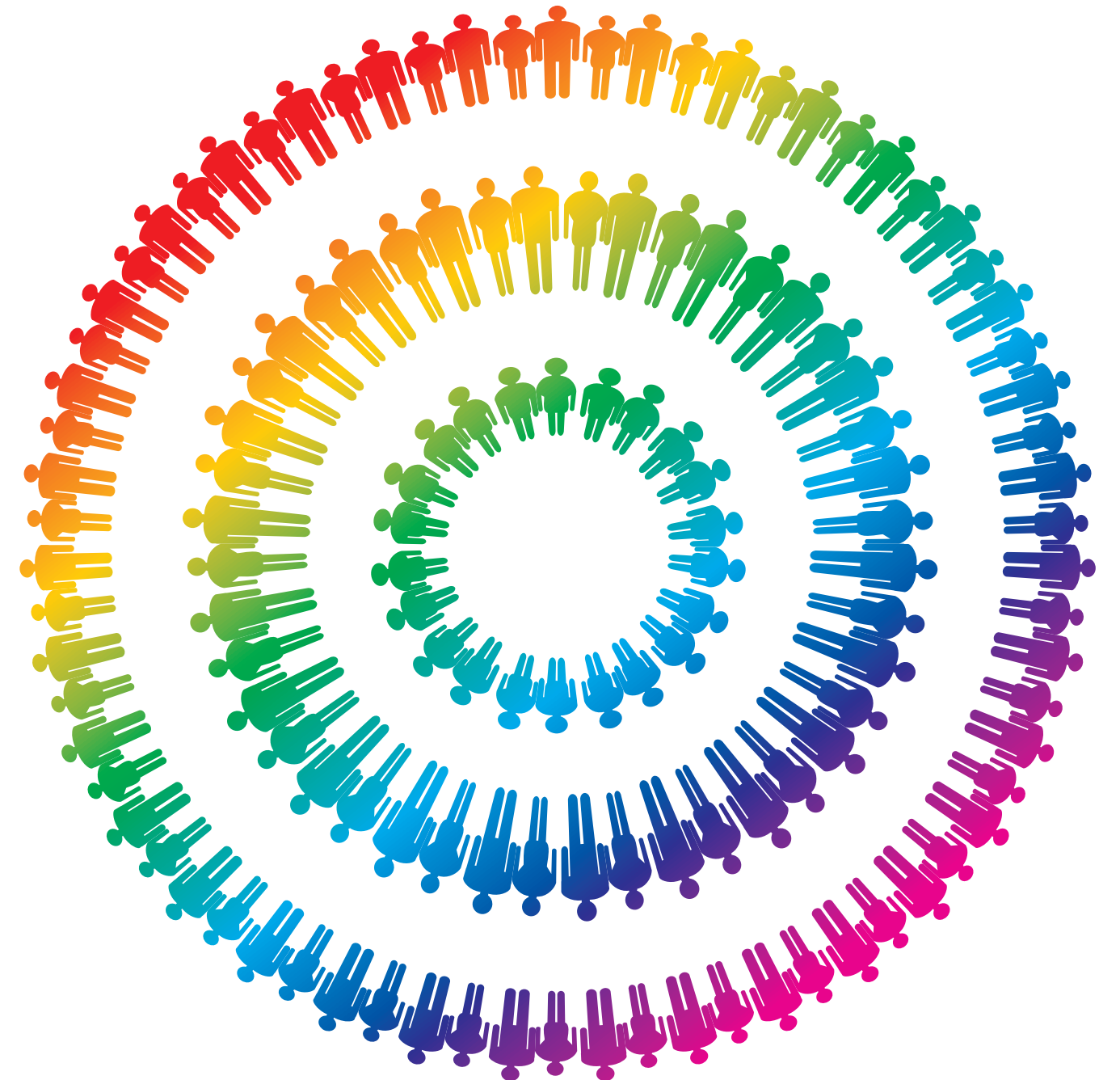
【上野駅及び御徒町駅】都02大塚駅行→湯島四丁目下車（御徒町駅のみ）  
学07東大橋内行→東大（龍岡門、病院前、構内バス停）下車



お申し込み先 〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学総務部内  
財団法人 東京大学総合研究会

お問い合わせ 電話 03-3815-8345（直通）  
ホームページ [http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04\\_01\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_j.html)  
～多数の方の聴講を心から歓迎いたします～

# 第104回 平成18年春季 東京大学公開講座「人口」



主催 東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO  
（財）東京大学総合研究会

## 開講にあたって



東京大学公開講座にようこそおいで下さいました。本公開講座は、50余年の歴史を有し、その時代に則するようなテーマで開催されてきました。今回はテーマとして「人口」を取り上げます。

05年は国勢調査の年にあたっておりました。すでにマスコミにも公表されたように、戦後人口が増え続けてきた日本社会に大きな転換期が訪れ、政府の推計より1年早く、人口の自然減が始まりました。昨年生まれた子供の数がお亡くなりになった方の数を下回ったのです。現代社会が直面する少子化、人口減少の問題は、労働力不足や市場の縮小化と関連し、慎重に対応しなければ国力の衰退

につながりかねない深刻な問題です。一方、世界の人口は64億人を超え、増加の一途をたどっており、そこには、教育、食糧、環境など、国際的な視野で考えなければならない問題が山積しています。

本講座では、「人口」を一つの切り口として、人類がかかえるこれらの諸問題を考察したいと思います。また、歴史的視点から人口の変遷と都市や国家の形成、さらには、生物の個体群との比較など、広い意味での「人口」と関連した興味深い話題を扱います。東京大学の叡智を結集して、歴史学、社会学、教育学、医学、生物学、経済学、都市工学、地理学、数理科学などを含む幅広い分野の視点からお話いたしますので、土曜の午後のひととき、馥郁たる学問の香りをゆっくりとお楽しみ下さい。

平成18年4月  
第104回東京大学公開講座企画委員会  
委員長 **桂 利行**  
(東京大学大学院数理科学研究科長)

### 講義日程

※やむを得ない事情によりプログラムを変更する場合があります

第1日 4月1日(土)		
13:30~13:40	開講の挨拶	小宮山宏 (東京大学総長)
13:40~15:00	人口学の考え方と人口問題	稲葉 寿 (大学院数理科学研究科・助教授)
15:20~16:40	遺伝子レベルからみた生物集団と適応	岸野洋久 (大学院農学生命科学研究科・教授)

第2日 4月8日(土)		
13:30~14:50	子どもの数と不就学 ー戦前の就学率ー	土方苑子 (大学院教育学研究科・教授)
15:10~16:30	動物社会の人口論	嶋田正和 (大学院総合文化研究科・教授)

第3日 4月22日(土)		
13:30~14:50	日本人はどこに住んできたか ー戦後日本の人口移動とライフコースー	荒井良雄 (大学院総合文化研究科・教授)
15:10~16:30	逆都市化時代のまちづくり	大西 隆 (先端科学技術研究センター・教授)

第4日 5月13日(土)		
13:30~14:50	人口・食糧・環境	石見 徹 (大学院経済学研究科・教授)
15:10~16:30	8億人分の食糧が毎年病気で消えている： 植物医師の養成と植物病院の展開を目指して	難波成任 (大学院農学生命科学研究科・教授)

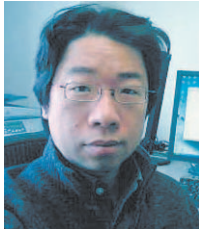
第5日 5月20日(土)		
13:30~14:50	人口停滞の世紀とその後	近藤和彦 (大学院人文社会学系研究科・教授)
15:10~16:30	人口減少社会を生きる	赤川 学 (大学院人文社会学系研究科・助教授[4月兼任予定])
16:30~16:40	閉講の挨拶	桂 利行 (企画委員長・大学院数理科学研究科長)

## 各講師講義内容の概略

4月1日(土)  
13:40~15:00

### 「人口学の考え方と人口問題」

大学院数理科学研究科・助教授 稲葉 寿



昨年末に戦後はじめて日本の人口が減少に転じたという推計が公表されました。日本における人口問題は、生存資源に対する人口の過剰という古典的問題から遠く離れて、「少子化」「高齢化」「人口減少」の問題へと劇的に転換しましたが、これは遠くならず世界の他の国々も経験するであろう普遍的事態に他なりません。日本はその先端を走っているわけです。この人口問題3点セットのなかでは、「少子化」が原因で、「高齢化」「人口減少」はその結果です。そのメカニズムを理解するために人口学(demography)の基本的な考え方を、日本の少子化を例として紹介したいと思います。

15:20~16:40

### 「遺伝子レベルからみた生物集団と適応」

大学院農学生命科学研究科・教授 岸野洋久



生物集団の大きさを測ることは、意外と難しい。船を走らせてクジラを調査し、飛行機を飛ばしてマグロを調査する。こうした調査ができない集団も数多くある。遺伝子を比較して、遺伝子の近さと変化のスピードを測ることにより、集団の大きさと適応の様子を推し量ることができ。ウイルス集団が宿主に適応する姿や、蚊の集団が氷河期の終わりに膨張する様子が、浮き彫りになる。数千年の農耕の歴史で育種選抜された、「役に立つ」遺伝子が見えてくる。

4月8日(土)  
13:30~14:50

### 「子どもの数と不就学 ー戦前の就学率ー」

大学院教育学研究科・教授 土方苑子



日本は早くから就学率の高い国ということになっています。しかし、90%以上の就学率を誇ったはずの明治の終わり頃でも、学校に行かなかった女の子のことが沢山史料に出てきます。また学齢簿・学籍簿上では、ある時期まで絶えず女子生徒数の方が少ないということがしばしばあります。このような就学率統計にはどういう仕組みがあるのでしょうか。またこの理由を探っていくなかから、今とは異なるその頃の学校のありかたを見つけてみたいと思います。

15:10~16:30

### 「動物社会の人口論」

大学院総合文化研究科・教授 嶋田正和



年末のニュースで日本の総人口はついに減少に転じたと大きく報道された。合計特殊出生率も2005年度は1.26まで低下する予測も出ている。どうやら日本の人口は直ぐには回復できないようだ。では、自然界に目を向けると、動物社会の人口はどうなっているのだろうか？実は、動物にもヒトの人口と同じ理論や分析がそのまま適用できる。人口動態も、平衡レベルで安定するもの、初期の小集団から増殖してやがて減衰するもの、一定周期で振動するもの、不思議なカオスになるもの、さまざまである。人口論の観点から人と動物社会の比較を解説したい。

4月22日(土)  
13:30~14:50

### 「日本人はどこに住んできたか」 ー戦後日本の人口移動とライフコースー

大学院総合文化研究科・教授 荒井良雄



2005年国勢調査の結果が発表され、いよいよ日本が「人口減少社会」に入ったことが話題になりました。あと数年でいわゆる「団塊の世代」のリタイアも本格化します。かれらは60年代から70年代に、地方から都会へ大量に移住し、戦後日本の高度成長を支える中心となった人々ですが、その高度成長もそろそろ「歴史」の範疇に入ろうとしています。戦後日本の都市空間のあり様、特に、地方から大都市への人口流入とその帰結を、そこに住む人々のライフコースの面から、あらためて考えてみたいと思います。

5月13日(土)  
13:30~14:50

### 「人口・食糧・環境」

大学院経済学研究科・教授 石見 徹

地球上の人口増加が続くと、やがて食糧不足が深刻化するという懸念を、どのように考えればよいだろうか。本講では第1に、人口増加の趨勢から、最近では発展途上国においても増加率が通減してきたことを確認し、その原因を推測する。第2に食糧の生産動向をふり返り、核心にある問題が生産量ではなく分配にあることを明らかにする。とりわけ途上国にとっては、農業生産性の向上がまだ必要であるが、生産性向上の背後に環境問題の制約があることを指摘したい。

5月20日(土)  
13:30~14:50

### 「人口停滞の世紀とその後」

大学院人文社会学系研究科・教授 近藤和彦



近代的な国勢調査(センサス)による広域の人口調査が始まるのは、18世紀の欧米においてである。しかし、歴史研究によって、中世末からのヨーロッパの人口動態が明らかにされている。これによると「大航海」や宗教改革の時代にヨーロッパの人口が増え、経済も好況であったが、17世紀に入ると人口は停滞し、不況に見舞われた。戦争や疫病もつづいた。この人口停滞の17世紀が歴史的に占める位置は重要で、この前と後では世界史のプレーヤーが交替した。停滞期に何をするかということが、後の国民の運命を決めたのである。ユーラシアや日本も含めて、人口動態と歴史の変動について考えてみよう。

15:10~16:30

### 「逆都市化時代のまちづくり」

先端科学技術研究センター・教授 大西 隆



人口減少とともに、日本の多くの都市圏では、中心部でも郊外部でも人口減少する逆都市化時代を迎える。都市の活性化という点では厳しい時代の到来だが、都市に緑や水辺を取り戻し、ゆとりある生活を可能にする好機でもある。高密度社会の長所でもあった効率性や、環境への負荷の少なさなどを継承しつつ、混雑に慣れてきた日本人の都市観を変え、ゆとりある都市社会を形成していくには逆都市化の中で何をしていけばよいかを考える。

15:10~16:30

### 「8億人分の食糧が毎年病気で消えている： 植物医師の養成と植物病院の展開を目指して」

大学院農学生命科学研究科・教授 難波成任



世界の食糧生産のうち三分の一は植物に病気を起こす微生物や生育障害・病的症状の原因となる昆虫・化学物質・雑草などにより失われており、特に病気による損失は12%にも達します。これは年間8億人以上の人口を養える量で、ちょうど世界の飢餓人口に相当します。薬剤等を用いた対策がないと、食糧生産の半分以上が失われます。これを病気などから守り、治療するため、植物のお医者さん「植物医師」を養成し、「植物病院」を創設する研究分野「植物医学」を推進する必要があります。

15:10~16:30

### 「人口減少社会を生きる」

大学院人文社会学系研究科・助教授(4月兼任予定) 赤川 学



21世紀の日本において、さまざまな少子化対策が実施されようとしているが、少子化と人口減少の傾向に歯止めをかけることはできない。だが、おそれることはない。少子化が年金制度を破綻させ、経済成長を鈍らせるとしても、それは、子どもを増やすことによってではなく、少子化を前提とした制度設計によって解決できるし、そうすべきである。以上の観点から、人口減少社会を生きぬくために、私たちが有すべき理念を論じたい。